

ESC2024 参加報告

東京ベイ・浦安市川医療センター 循環器内科 加藤奈穂子

この度、第16回 Travel Award for Women Cardiologist(JCS/TAWC)よりご支援を賜り、ロンドンで8月30日から9月2日に行われた European Society of Cardiology 2024 に現地参加してまいりました。35度を超える蒸し暑い日本の気候とは逆に、ロンドンは20度前後の気温で過ごしやすい気候でした。各国から多くの参加者があり、盛り上がりを肌で感じることができました(図1)。

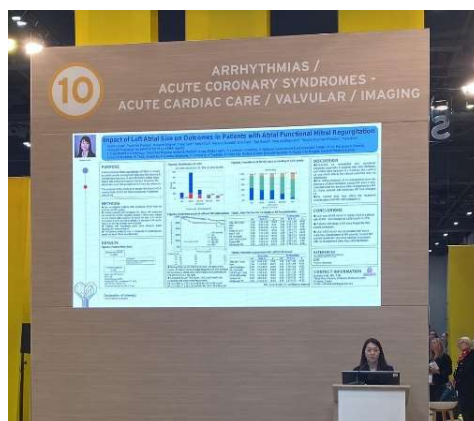
私は心エコー診断を中心に臨床業務・研究に取り組んでおり、弁膜症、structural heart disease (SHD)、心筋症にかかわる心不全に注目してセッションに参加しました。Hot Line というメインアリーナで行われたセッションでは、最新の注目すべき研究の報告がありました。SHD に関しては TAVI や M-TEER は日本でもおなじみの治療となっていますが、TAVI と PCI の同時施行に関する研究、TAVI 中の抗凝固療法の中絶による影響を評価した研究、機能性僧帽弁逆流に対する M-TEER が外科手術に劣らなかった研究など多くの報告がありました。今回の ESC では、薬剤が循環器疾患の予後を改善させる研究が印象的でした。本邦では2型糖尿病による腎不全に適応がある非ステロイド型ミネラルコルチコイド受容体拮抗薬のフィネレノンですが、心機能正常または軽度低下 (LVEF $\geq 40\%$) した心不全症例で、心不全イベントや心血管死亡をプラセボ群に比較して有意に低下させました。今後、HFpEF への治療効果も期待されます。また、HOCM に対する心筋ミオシン阻害薬であるマバカムテンやアフィカムテンについてのセッションも多くありました。この薬剤では、左室内閉塞を改善し、BNP を低下させること、症状を改善し、 β ブロッカーの次の薬剤になる可能性などが示唆されていました。HOCM で苦しむ患者さんも多く経験するため、日本への導入が期待されました。

私の研究発表についてですが、本邦で進行中の心房性機能性僧帽弁閉鎖不全症(AFMR)の多施設共同研究である REVEAL AFMR study のサブ

図1



図2



スタディとして、左房拡大の予後への影響を調査し moderated poster として発表の機会をいただきました（図2）。AFMR は、近年に新しく提唱された概念の弁膜症で、心房細動などによる僧帽弁輪拡大に伴っておこる僧帽弁逆流です。中等度以上の AFMR において、左房容積係数は 50-99 mL/m² が 55% で最も多く、150mL/m² 以上が 13% で観察されました。この左房拡大は、高度 AFMR と独立して予後不良であることが示しています。AFMR の治療にも影響するデータと考えられ、注目度が高かったのではないかと思います。

学会中は、日本各地や世界の先生方との交流することができました。私の留学中の指導医である Mayo Clinic の Patricia Pelikka 先生と近況を報告し、私が取り組んでいる研究の意見をうかがうこともできました（図3）。先生方と顔を合わせて話ができることは今後の知識の共有や仕事の発展にもつながり、現地参加の醍醐味だと思います。このような充実した学会参加となり、ご支援いただきましたダイバーシティ推進委員会の皆様、REVEAL AFMR study の皆様、東京ベイ医療センターハートセンターの皆様に感謝申し上げます。引き続き、研究活動に邁進していきたいと思っています。

図 3

